

其中日記

(四)

種田山頭火

青空文庫

其中一人として炎天

山頭火

七月十一日

天気明朗、心気も明朗である。

釣瓶繩をすげかへる、私自身が縋うた棕櫚繩である、これで当分
楽だ、それにしても水は尊い、井戸や清水に注連を張る人々の心
を知れ。

百合を活ける、さんらんとしてかゞやいてゐる、野の百合のよそ

ほひを見よ。

樫野川にそうて散歩した、月見草の花ざかりである、途上数句拾うた。

昼食のおかずは焼茄子、おいしかった。

此頃は茄子、胡瓜、胡瓜、茄子と食べつゞけてゐる。

・ けさは逢へる日の障子あけはなつ（追加一句）

青田いちめんの長い汽車が通る

・ 炎天かくすところなく水のながれくる

・ 涼しい風が、腰かける石がある

・ すすしうて蟹の子

・ ふるさとちかく住みついて雲の峰

水をわたる高圧線の長い影

・ 日ざかりのお地藏さまの顔がにこにこ

野菜に水をやる、栄養の水でもあれば感謝の水でもある。

△其中庵はまことに雑草の楽園であり、虫の宿である、草は伸びたいだけ伸び、虫は気まゝに飛びあるく。……

蝸！ ゆふべの窓からはじめて裏山の蝸を聞いた。

とても蚊が多いから、といふよりも、私一人に藪蚊があつまつてきて無警告で螫すから、まだ暮れないのに蚊帳を吊つて、その中で読書、我儘すぎるかな。

△或る日はしづかでうれしく、或る日はさみしくてかなしい、生きてみてよかつたと思ふこともあれば、死んだつてかまはないと

考へることもある、君よ、孤独の人生散歩者を笑ふなかれ。

・ 昼寝の顔をのぞいては蜂が通りぬける

もつれあひつつ胡瓜に胡瓜がふとつてくる

・ 炎天のの虫つるんだまんま殺された

・ もいでたべても茄子がトマトがなんぼでも

心中が見つかつたといふ山の蝸よ

今から畑へなかく暮れない山のかなく

追加一句

・ 飯のしろさも家いつぱいの日かげ

七月十二日

月明に起きて蛙鳴を聴く、やがて蟬声も聴いた。

玉葱といつしよに指を切つた、くれなるあざやかな血があふれた、
肉体の疵には強い私だが、疵の痛みには弱い私だ。

生死一如、物心一枚の境地——それは眼前脚下にある、——それが解脱だ。

五時半出立、九時から十二時まで秋穂行乞、三時半帰庵。

米 二升二合

酒 式十銭

今日の所得

今日の買物

銭 二十六銭

ハガキ 三銭

この二合の酒はともうまかつた、文字通りの甘露だつた。

秋穂はさすがに八十八ヶ所の霊場だけに、殊に今日は陰暦の二十日だけに、お断りは殆んどなかつた。

・ 朝月まうへに草鞋はかろく

・ よちくあるけるとしよりに青田風

・ 朝月に放たれた野羊の鳴きかはし

・ 田草とる汗やらんくとして照る

・ 木かげ涼しくて石仏おはす（改作）

・ 炎天の虫をとらへては命をつなぐ

・ 一人わたり二人わたり私もわたる涼しい水

・ 重荷おろすやよしきりのなく

小豆飯と菓子とのおせつたいをいたゞいた、まことに久しぶりの

お接待！

信心遍路さんが三々五々ちらほらと巡拝してゐる、わるくない風景である、近代風景ではないけれど。

女学生が二三人づつ、自転車に乗つて、さつさうとして走つてくる、これは近代風景だ、そしてこれもわるくない風景だ。

村の処女会の人々がにぎやかに神社の境内を洒掃してゐる、辻々には演習兵歓迎の日の丸がへんぽんとひるがへつてゐる、これもまたわるくない風景だ。

△土手の穂すゝきがうつくしかつた、旧家には凌霄花、野には撫子、青田風があをくくと吹く。

往復七里、帰途の暑さはこたえた、しかし、のんびんだらりと坐

つてゐるよりも歩いた方がたしかに身心をやしなふ。

・ 吸はねばならない血を吸うて殺された蚊で

・ とまればたたかされる蠅のとびまはり

・ 炎天の雲はない昼月

・ 草すゞし人のゆくみちをゆく

・ 炎天の機械と人と休んでゐる

・ 木かげたゝへた水もほのかに緋鯉のいろ

・ 茄子胡瓜胡瓜茄子ばかり食べる涼しさ

七月十三日

朝月はよいな、蛙のうたもよいな、キヤベツはうまいな。

桔梗が咲いた、虫の声がしんみりしてくる。……

網代笠を修繕する、いつぞや緑平老は、ずるぶん破れましたねと
いつた、樹明君は、新らしいのを買つてはどうかといふが、
物を活かせるだけ活かすのが禅門の教であり、同時に新らしい笠
をかぶるよりも一杯やりたいのが私の煩惱でもあり、熱心に紙を
張り渋を塗つて役立てるのである、このところ一句あるべくして
一句もなかつた。

△空蟻虫をなだめた、さりとてははかない酒徒なるかな、だ。

蝉（わし〜）大蝉（じん〜）が暑苦しく啼きだした。

追加

・ 月あかり蜘蛛の大きい影があるく

・ 月夜の道ばたの花は盗まれた

・ 昼ふかく草ふかく蛇に呑まれる蛙の声で

・ 待ちぼけの、寝るとする草に雨ふる

・ 待つでもない待たぬでもない雑草の月あかり

焼酎の御利益でぐつすり昼寝、覚めてから水をしたうて樵野川へ行く、何と河童少年少女の泳ぎまはつてゐること、そしてみんなそれ／＼に海水着を着て浮袋を持つてゐる。

一瓢を携へて網漁をやつてゐる老人がゐた、その余裕ぶりを少し羨ましく思つた。

私は二合入の空瓶を拾うて戻つた、行乞途上、般若湯を詰めて持

つてあるく用意として。

ひとり蚊帳の中に寝ころんで、好きな本を読む——極楽浄土はまさにこゝにある！

緩歩不休は山登りばかりの秘訣ではない、人生の事すべて然り。

掟（改訂）

一、辛いもの好きは辛いものを、甘いもの好きは甘いものを任意持参せられたし。

一、うたふもおどるも勝手なれども、たゞ春風秋水のすなほさでありたし。

一、威張るべからず、鬱ぐべからず、其中一人の心を持すべし。

主

右三章

山頭火しるす

夜、樹明君がバリカンを持つて来て、白髪頭を理髪してくれた、ありがたい、言語同断ありがたかつた。

机の上に蝉の子がちつとしてゐる、殻を脱いだばかりのみんく
 蝉である、今夜はこゝで休んで明日からは鳴いて恋してそして死
 ね、お前の一生は短かいけれど私たちよりは充実してゐるぞ。

七月十四日

其中庵

七月十五日

七月十六日

『行乞記』

青空文庫情報

底本：「山頭火全集 第五卷」春陽堂書店

1986（昭和61）年11月30日第1刷発行

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

入力：小林繁雄

校正：仙酔ゑびす

2009年1月15日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

W.aozora.gr.jp/) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランテイアの皆さんです。

其中日記

(四)

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫
著者 種田山頭火
URL <http://www.aozora.gr.jp/>
E-Mail info@aozora.gr.jp
作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU
URL <http://aozora.xisang.top/>
BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>